

母の涙

仁愛女子高等学校

山本 桜月

私の母はシングルマザーだ。シングルマザーというと、「かわいそう」とか「大変だね」と言われることが多い。でも私は一回も自分をかわいそうだと思ったこともないし、大変だと感じたこともない。毎日が平穏で幸せだ。

十年前、私が七才で弟が五才、妹が三才の時からずっと女手一つで私たちを育てている。母は普段は優しいが生活態度や口のきき方などに対しては厳しかった。でも、それ以上に厳しかったのが四才から習っているクラシックバレエについてだ。私の母も幼い時からバレエを習っていて今ではバレエの先生をしている。

私が小学五年生の時、二度目のコンクールを目前に控えていた時のことだった。家で自主レッスンをしていた私は母に踊りを見てほしいと頼んだ。もちろん母は快くきいてくれた。私がいつも通りに踊っていると、母は急に音を止めた。

「まだ途中なのに。」

と、私は少し怒りながら言った。すると母は、

「こんないい加減な踊り初めて見た。こんな風にしか踊れないなら、バレエを辞めなさい。」と、キリッとした厳しい口調で言った。私は悲しいのか、悔しいのかよく分からないがワンワン泣いた。そんな私の姿を見ていた母が、

「なに泣いてるの。泣いている暇があるなら練習しなさい。」と、さっきよりも厳しく、怒鳴るように言った。私は涙がこぼれないように上を向いて、ギョツと唇を噛んだ。そして練習を再び始めた。その日からコンクールまでの約一カ月間、毎日のように母と一緒に練習した。しかし、結果は惜しくも賞を逃してしまった。いつもよりもたくさん練習して、本番もミスなく踊れた分、私はとても悔しかった。その場で泣きたいぐらい悔しくて悲しかった。でも母に、

「もし、さあこの友達が入賞してさあこだけが賞をもらえなかったとしても絶対泣いたらだめだよ。入賞した子達が泣いてるさあこの前で喜べる？きつと気をつかって素直に喜べないから、泣きたくても平然を装ってきちんと心から『おめでとう』って言ってあげなさい。」と言われていた。だから必死に泣きたい気持ちを堪えていた。そんな私を見ていた母は、優しく頭をなでながらこう言った。

「よく頑張ったね。上手だったよ。」

母の声を聞いてずつと堪えていた涙があふれだした。

私は母のような「母親」になりたいと思っっている。つらいことや悲しいことがあった日

は顔を見ただけで、

「今日何かあったんでしょ。」

と、すぐに見抜いて優しく話しかけ、ささいなことでも話を聞いて一緒に悩んでくれる。お腹が痛い時はマッサージしてもらおうとすーっと痛みが消える。熱が出て、食欲がない時でも母が作る雑炊なら食べれたりする。一緒にいると安心できて、優しく時に厳しい母。そんな母はまるで魔法使いやスーパーマンみたいだと思う。

私が小学四年生の時。ある日のスーパーの帰り道で二人並んで歩いている時に、母に

「ねえ、ママ。私、大人になったらママみたいなママになる。」

と、少し恥ずかしがりながら言った。すると母は、

「ママみたいになんてならなくていい。」

と、つぶやくように言った。私は喜んでくれるものだと思っていたので、何て返事をすればいいのか分からなかった。横目でちらりと母の表情を窺ってみた。母は笑っているのもなく、怒っているのもなく、泣いているのもなかった。ただ母の瞳がすーっと遠くを見つめているように見えた。

それから六年後の高校一年生の冬、私は母にあの時と同じようなことを言った。

「ねえ、ママ。私、大人になったらママみたいなお母さんになりたいな。」

すると母は前と同じように、

「ママみたいになんてならなくていい。」

と、言った。でも、母はこの前とは違い笑顔でそう答えた。私が、

「なんで？」

と、言いながら母の顔を覗き込むと母はもう笑顔ではなかった。母は泣いていた。母の瞳から太陽の温かな光を浴びて、きらりと輝く一筋の涙がゆつくりと落ちた。私は初めて母が泣いている姿を見た。そして、こんなにも美しい泣き顔も初めて見た。